琉球大学学術リポジトリ

沖縄の酪農事情　（１）

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学農家政学部
	公開日: 2011-07-28
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 安谷屋, 隆司, Adaniya, Takashi
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/21388

沖縄の酪農事情(1)

1. 牛乳の需要の動き

沖縄の食生活も所得の増加によって年々高度化しつつあるのは周知のとおりである。その変化の内容をみると蔬菜，果実，肉乳卵類の消費が急速に増加しつつあるということである。近年の乳類の消費の動きをみると，特に1969年の消費量は1966年の2倍に伸びている。（第1表）

さて，このように増加しつつある牛乳の需要に対して供給はどのように行われているのであろうか。

2. 牛乳の供給事情

全沖縄の牛乳の（生乳換算）供給内容を農林局の資料でみると供給量の90％近くが輸入に依存している。そして年々の消費の伸びにつれて生産量，輸入量は共に増加しているが，一方自給率はわずかながら低下しつつある。

そこで，それらの伸び率をみると自給牛乳が1966年に比べ1969年は1.8倍であるのに，輸入牛乳は2.2倍に伸びている。このことからわかるように沖縄の牛乳供給力は需要増加に対応できず，その90％近くを輸入に依存している。

輸入額も1960年の834,000ドルに対し，1967年は2,565,000ドルで3倍になっている。沖縄における牛乳の需要と供給の動きは以上のとおりであるが，次に自給牛乳の供給に当る沖縄の酪農業についてみてみたい。（第1表参照）

第Ⅰ表　沖縄における需要と供給の推移

	年度	1965	'66（100％）	'67	'68	'69
供給	産乳量 (A)	87.6％	3,223,500kg	116.8	140.6	174.6
	輸入量 (B)	109.4％	21,761,900kg	119.7	158.2	219.4
計（A＋B＝C＋D）		106.6％	24,985,400kg	119.3	156.3	213.6
需要	輸出量 (C)	—％	83,200kg	1,194.2	2,503.7	3,382.3
	島内消費量 (D)	107.0％	24,902,300kg	115.7	148.5	203.0
自給率（A/A＋B）		10.6％	12.9	12.6	11.6	10.5
島内消費率（D/C＋D）		100.0％	99.7	96.7	94.7	94.7

備考：(1) 計は供給＝需要としてみる。
〃 (2) 1966年度を基準年次とし指数100として、欄の数値は実数とする。

3. 沖縄の酪農業の動き

(a) 酪農家戸数

1969年度の全沖縄の酪農家戸数は407戸で年々増加している。

酪農家戸数の動きを地区別年度別にみてみると，各々の地区において異った動きのあることがわかる。（第Ⅱ表参照）。まず**酪農家戸数の動きを伸び率**でみると，南部地区は1961年度以降，年々減少し続けていたが1966年度を境にして再び増加の傾向にあるのがうかがえる。

北，中部においては年々着実に増加していたが1967，68年度をピークにやや下降気味である。

八重山地区は1969年度は66年度の2倍という数値を示しており，宮古地区は不安定な状態を示している。

次に**地区別に酪農家の分布**をみると，各年度とも南部地区に最も多く集中している。1966年度に中部と北部のウェイトが大きくなったが69年度には減少している。これは南部地区の伸びに反し，北部地区の減少，中部地区の停滞によるものである。

八重山地区は伸び率は大きいが，もともと戸数が少いので，その全沖縄に占めるウェイトは最も小さい。宮古地区は不安定な状態を示し，一進一

第Ⅱ表　酪農家戸数の分布と伸び率

		1964	'65	'66	'67	'68	'69
(A) 伸び率 1966年＝100	全沖縄	99.3%	102.9	275戸	127.3	139.6	148.0
	北　部	63.6%	86.4	22戸	150.0	140.9	122.7
	中　部	76.7%	78.1	73戸	135.6	139.7	113.7
	南　部	115.6%	111.4	167戸	122.8	141.3	169.5
	宮　古	81.8%	172.7	11戸	90.9	109.1	90.9
	八重山	100.0%	100.0	2戸	150.0	150.0	200.0
(B) 分布 全沖縄＝100	全沖縄	273戸	283戸	275戸	350戸	384戸	407戸
		%	%		%	%	
	北　部	5.1	6.7	8.0	9.4	8.1	6.6
	中　部	20.5	20.1	26.6	28.3	26.6	20.4
	南　部	70.7	65.7	60.7	58.6	61.5	69.5
	宮　古	3.3	6.7	4.0	2.9	3.1	2.5
	八重山	0.7	0.7	0.7	0.9	0.8	1.0

備考：(A)は1966年度を基準値（＝100%）とし、その欄に実数を入れた。
(B)は全沖縄を基準値（＝100%）とし、その欄に実数を入れた。

退を続けているが69年度には，伸び率，ウェイトともに後退している。

以上の中で特徴的なものは，南部地区への集中度の高いことであり中，南部両地区を合せると1969年度に86.2%がこの両地区に集中していることである。

(b)　乳用牛飼養頭数

乳用牛飼養頭数の動向をみると，まず全沖縄についてみれば1969年度には2,372頭に達し，1966年度の1.8倍になり，年々25%前後が増加しているのがわかる。（第Ⅲ表）

地区別に乳用牛飼養頭数の増減の動向を1966年度を基準にして1969年の伸び率をみると，北部地区の伸び率が最も大きく2.8倍に増加し，つづいて南部と中部が1.8倍，1.6倍とそれぞれ増加している。宮古地区は1966年度までは順調な伸びを示しているが，その後は不安定な状態をつづけ1969年度には18%の減少を示している。

八重山地区は1965年度から1966年度にかけて大きな伸びを示し，その後も順調な伸びで1969年度には1.6倍に増加している。

次に**乳用牛の分布を**みてみると1960年度以降各年度を通して南部地区へ集中しているのがわかる。そして特に目立った動きとして北部地区の比率が傾向として大きくなりつつあるのが注目される。

第Ⅲ表　乳牛飼養頭数の地区別伸び率および分布

		1964	'65	'66	'67	'68	'69
(A) 伸び率 1966年＝100	全沖縄	72.1%	85.8	頭 1321	125.7	153.3	179.6
	北　部	61.2%	82.1	67	197.0	207.5	282.1
	中　部	65.4%	67.6	312	119.9	160.3	161.2
	南　部	76.8%	94.8	825	125.0	151.0	187.2
	宮　古	57.4%	75.0	68	88.2	105.9	82.4
	八重山	69.4%	69.4	49	128.6	138.8	163.3
(B) 分布 全沖縄＝100	全沖縄	952頭	1133	1321	1660	2025	2372
		%	%	%	%	%	%
	北　部	4.3	4.9	5.1	8.0	6.9	8.0
	中　部	21.4	18.6	23.6	22.5	24.7	21.2
	南　部	66.6	69.0	62.5	62.1	61.5	65.0
	宮　古	4.1	4.5	5.1	3.6	3.6	2.4
	八重山	3.6	3.0	3.7	3.8	3.4	3.4

備考：(A)は1966年度（＝100%）を基準値とし、その欄に実数を入れた。
(B)に全沖縄を基準値（＝100%）とし、その欄に実数を入れた。　（安谷屋隆司）